平城京東市跡推定地の調査 XV

第19次発掘調査概報

奈良女子大学蔵書
981006701003

平成9年

奈良市教育委員会

210.2
97

あ　い　さ　つ

平城京はその昔、国の中心として栄えていました。奈良市には、奈良時代の国宝や重要文化財、史跡などの文化遺産が数多く残されています。

奈良市教育委員会では、こうした文化遺産を後世に伝えるのみならず、私達の心のよりどころとなるよう文化財の保存、活用を推進しているところです。

平城京の官営市場である「東市」は、奈良市の辰市小学校の東側に広がる水田、池がその中心部分であると推定されています。近年、東市跡推定地周辺では急速に宅地化が進み、遺跡の調査が重要な課題となってきています。奈良市は平城京東市跡範囲確認調査を昭和56年度から継続的に実施しており、発掘調査の進展が多いに期待されているところです。

ここに平成８年度の平城京東市跡推定地の概要報告書を取りまとめることができました。

今回の調査にあたりまして多大なご理解とご協力を賜りました土地所有者の谷田清隆氏をはじめ、関係各位、諸機関に対し厚くお礼申し上げますとともに、今後ともご協力賜りますようお願い申しあげます。

平成９年３月

奈良市教育委員会

教育長　河　合　利　一

98100670

（表紙）

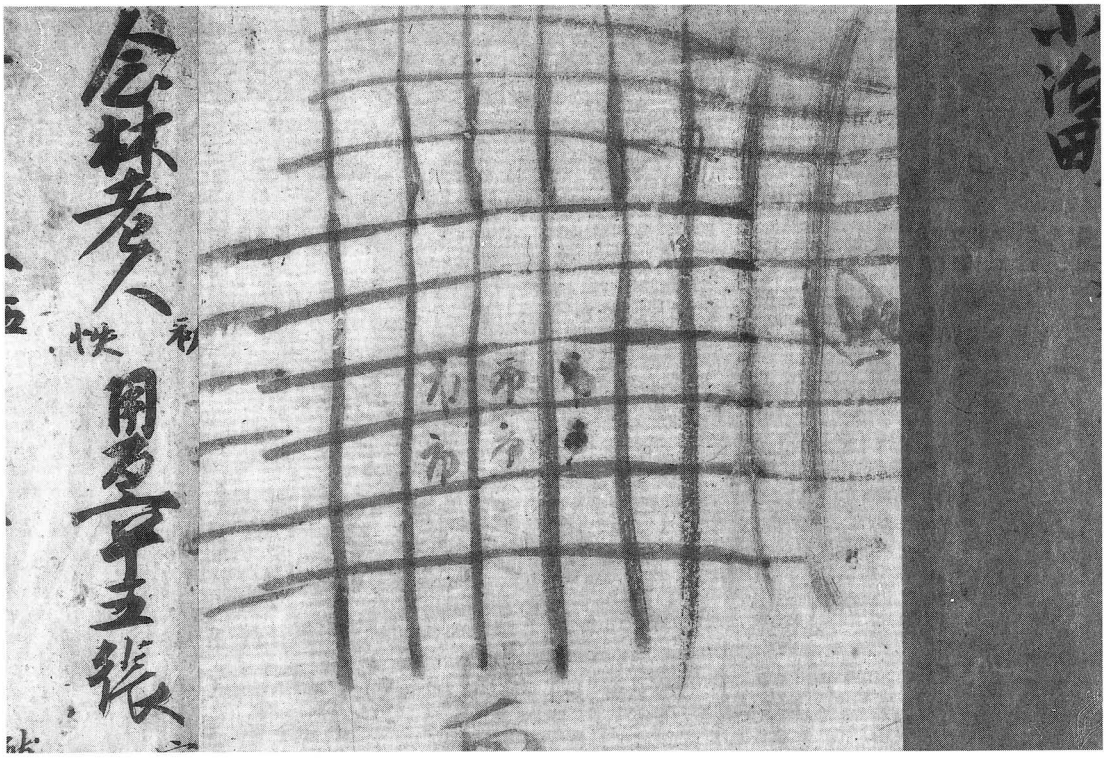


fig. 1　浄土宗総本山知恩院所蔵「平城京市指図」『写経所紙筆授受日記』紙背

例　　言

1．本書は平成８年度に実施した平城京東市跡推定地第19次発掘調査の概要報告である。

2．調査次数、調査期間、面積及び調査地番は下記のとおりである。

　第19次調査　平成８年11月18日～12月27日　400㎡　奈良市杏町584番地

3．調査は奈良市教育委員会社会教育部文化財課埋蔵文化財調査センターが実施した。

4．現地調査は技術吏員秋山成人が担当した。調査補助員として山口均が参加した。

5．調査にあたっては土地所有者である谷田清隆氏のご理解とご協力をいただいた。記して感謝致します。

6．表紙の写真については浄土宗総本山知恩院、Ｘ線撮影については奈良大学保存科学研究室の協力を得た。

7．本書の執筆及び編集にあたっては埋蔵文化財調査センター職員の協力を得て秋山成人が行なった。

目　　次

Ⅰ　はじめに……1
Ⅱ　調査概要　1　層　　序……3
　　2　検出遺構……3
　　3　出土遺物……7
Ⅲ　まとめ……8

挿　　図

fig. 1　「平城京市指図」　序文裏
fig. 2　平城京条坊と東市位置図　（1／75,000）　1
fig. 3　東市跡推定地周辺の調査位置図　（1／5,000）　2
fig. 4　発掘区東壁土層断面図　（1／80）　3
fig. 5　遺構平面図　（1／150）　4
fig. 6　土器埋納遺構ＳＸ298平断面図　（1／40）　5
fig. 7　土器埋納遺構ＳＸ300平断面図　（1／20）　6
fig. 8　土器埋納遺構ＳＸ301平断面図　（1／20）　6
fig. 9　出土遺物実測図　（1／4）　8
fig. 10　「平安京東市図」　9

表

tab. 1　東市跡推定地調査一覧表　2
tab. 2　報告書抄録　15

図　　版

pl. 1　発掘区全景（東から）　10
pl. 2　発掘区全景（西から）　10
pl. 3　発掘区全景（北から）　11
pl. 4　発掘区全景（南から）　11
pl. 5　土器埋納遺構ＳＸ300　（西から）　12
pl. 6　土器埋納遺構ＳＸ300断面（西から）　12
pl. 7　土器埋納遺構ＳＸ298　（西から）　12
pl. 8　土器埋納遺構ＳＸ301　（西から）　13
pl. 9　土器埋納遺構ＳＸ301断面（西から）　13
pl. 10　土器埋納遺構ＳＸ302　（西から）　13
pl. 11　土器埋納遺構ＳＸ301
　出土土器平面Ｘ線写真　14
pl. 12　土器埋納遺構ＳＸ301
　出土土器立面Ｘ線写真　14

Ⅰ　はじめに

東市の役割　奈良時代は我が国最初の貨幣である和同開珎が鋳造され、貨幣による経済体制を確立しようとした時代である。平城京の東市・西市はこの貨幣経済を成立させるために重要な役割を担っていた。平城京東市・西市は政府直轄の「市」で市司によって管理統制され、市には特定の人しか店を持つことができなかった。商品は地方からの調・庸の余った品を売買していたようである。

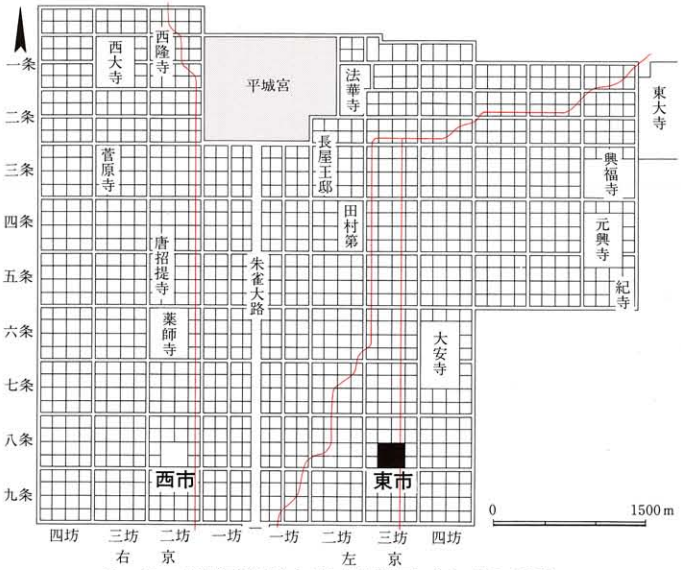


fig. 2　平城京条坊と東市位置図（1／75,000）

平城京東市の範囲　平城京では右京に西市、左京に東市が設けられている。このうち東市の推定地は現在の奈良市東九条町・杏町に比定されている。平城京東市の位置について多くの説が述べられ、関野貞氏は旧地名の大字杏字辰市を根拠に東市の位置を推定した。西村真次氏は京都知恩院所蔵の写経所関係文書紙背の「平城京市指図」(fig.1)から、平城京左京八条二坊五・六・七・十・十一・十二坪の六坪に比定した。福山敏夫氏は『薬師院文書』の土地売買の記録から、平城京左京八条三坊五・六・七・十・十一・十二坪を比定した。今泉隆雄氏は「平城京市指図」に墨で消された文字があるとして平城京左京八条三坊五・六・十一・十二坪の四坪とし『拾芥抄』に記された「平安京東市図」(fig.10)が、内町と市司・屋市の四坪分であることも指摘している。奈良市教育委員会では平城京左京八条三坊五・六・十一・十二坪を東市推定地として範囲確認調査を行なっている。

これまでの調査成果　昭和56年以来継続してきた調査から東市跡推定地の条坊遺構の他、六坪では、南北に連なる3棟の総柱建物・北西隅においての総柱建物・北辺築地・東辺に開く門と坪の中央やや南側で空地がある。十一坪では、北辺築地・北辺に開く門・東堀河と堀河に架かる橋を検出している。しかし、総柱建物が平城京内の他の宅地に比べて多い以外、東市と断定する根拠は未だ明らかでない。また「平安京東市図」を参考に同じ配置とすれば、推定地内の五坪・六坪は内町、屋市が十一坪、東市司が十二坪となり、市の主体部は十一・十二坪に集中していると考えられ、今回の調査地は六坪の西辺中央付近であり、市に携わる人々の家が建ち並ぶ内町にあたると考えることもできる。

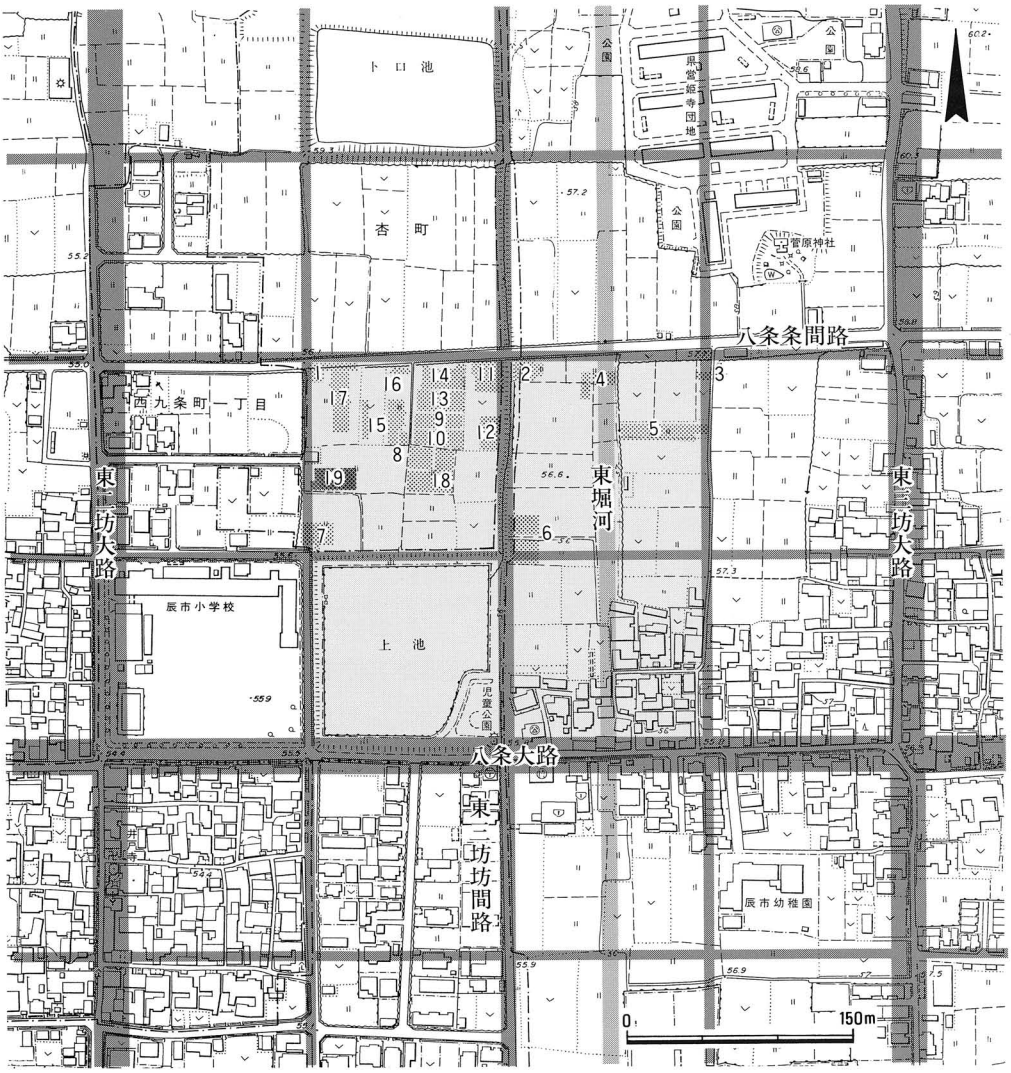


fig. 3　東市跡推定地周辺の調査位置図　（1／5,000）

調査次数	調査期間	調査地番	面積
第1次	昭和57年2月15日～3月30日	杏町583－1	240㎡
第2次	昭和57年4月20日～8月7日	東九条町441－1	240㎡
第3次	昭和57年5月19日～6月24日	東九条町493－1 444	125㎡
第4次	昭和58年4月20日～6月24日	東九条町444-1 442-1・2	220㎡
第5次	昭和59年11月9日～12月26日	東九条町445	510㎡
第6次	昭和60年11月19日～61年3月19日	東九条町437 438	600㎡
第7次	昭和61年11月4日～62年1月22日	杏町592	340㎡
第8次	昭和62年10月21日～12月25日	杏町586 581－1	290㎡
第9次	昭和63年11月24日～平成元年1月11日	杏町580－1	300㎡
第10次	平成2年1月17日～3月20日	杏町580－1	410㎡
第11次	平成2年11月5日～12月28日	杏町579－1	410㎡
第12次	平成3年10月14日～11月22日	杏町579－1	300㎡
第13次	平成4年11月10日～12月18日	杏町580－1	449㎡
第14次	平成5年11月12日～12月27日	杏町580－1	460㎡
第15次	平成6年2月22日～3月7日	杏町582－1・4	84㎡
第16次	平成6年11月17日～12月27日	杏町589－1	325㎡
第17次	平成7年10月2日～11月15日	杏町583－1	530㎡
第18次	平成7年11月21日～12月26日	杏町586	644㎡
第19次	平成8年11月18日～12月27日	杏町584	400㎡

tab. 1　東市跡推定地調査一覧表

II　調査概要

1　層　序　発掘区内の土層堆積状態は、現地表から暗灰色土(耕作土)、赤灰色土、淡褐色土(床土)、淡褐灰色土、褐灰色土、淡茶褐色土と続き、地表下約0.5ｍで淡黄灰色粘土の地山となる。発掘区南西では地山上面に茶褐色土(奈良時代整地土)が堆積している。遺構は、淡黄灰色粘土の地山上面で検出した。遺構検出面の標高は、発掘区北東隅55.7ｍ、南西隅55.55ｍで、北東から南西にかけ緩やかに傾斜している。

2　検出遺構　本調査地は、左京八条三坊六坪の西辺中央やや南よりに位置する。検出した遺構には奈良時代の掘立柱建物・掘立柱塀・井戸・土器埋納遺構・土坑・溝、平安時代の掘立柱建物、時期不明の土坑がある。

奈良時代の遺構　奈良時代のものには、掘立柱建物10棟、掘立柱塀２条、井戸２基、土器埋納遺構４基、土坑１基、溝２条がある。

ＳＤ031　発掘区南辺で、幅0.9ｍ、深さ0.11ｍの断面Ｕ字形を呈する東西溝を長さ18.5ｍ分検出した。重複関係から建物ＳＢ292・293より古い。埋土は灰褐色土で８世紀後半の土師器・須恵器・製塩土器が出土した。重複関係から溝ＳＤ032より古いことがわかる。

ＳＤ032　発掘区東で、幅0.75ｍ、深さ0.15ｍの断面Ｕ字形を呈し南北とも発掘区外へ続く溝を検出した。重複関係から建物ＳＢ285・塀ＳＡ294より古いことがわかる。埋土は褐灰色粘土で、８世紀の土師器・須恵器・奈良三彩の陶枕が出土した。

ＳＢ284　発掘区東辺で桁行４間(8.4ｍ)、梁間３間(5.85ｍ)以上の西廂付南北棟建物を検出した。柱間寸法は桁行2.1ｍ等間、梁間1.8ｍ、廂の出は2.25ｍである。重複関係から建物ＳＢ285より古いことがわかる。桁行の南から１間目の柱筋に間仕切りの柱がある。

ＳＢ285　発掘区北東隅で桁行４間(7.2ｍ)、梁間３間(5.4ｍ)以上の南廂付東西棟建物を検出した。柱間寸法は桁行、梁間、廂の出とも1.8ｍ等間である。

ＳＢ286　発掘区北西隅で桁行３間(5.4ｍ)以上、梁間２間(3.6ｍ)以上の南廂付東西棟

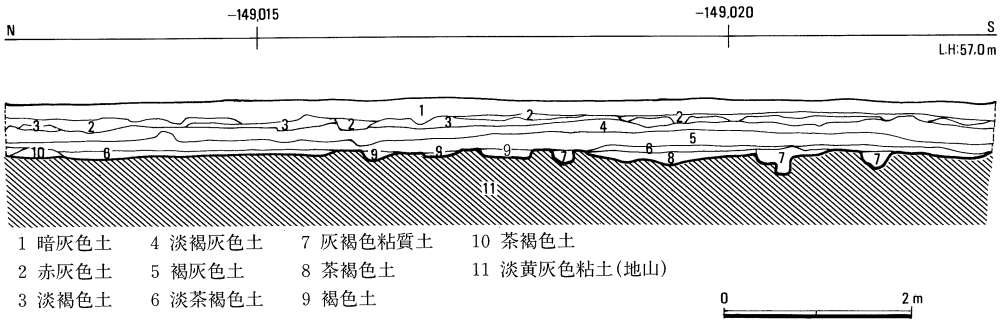


fig. 4　発掘区東壁土層断面図（１／80）

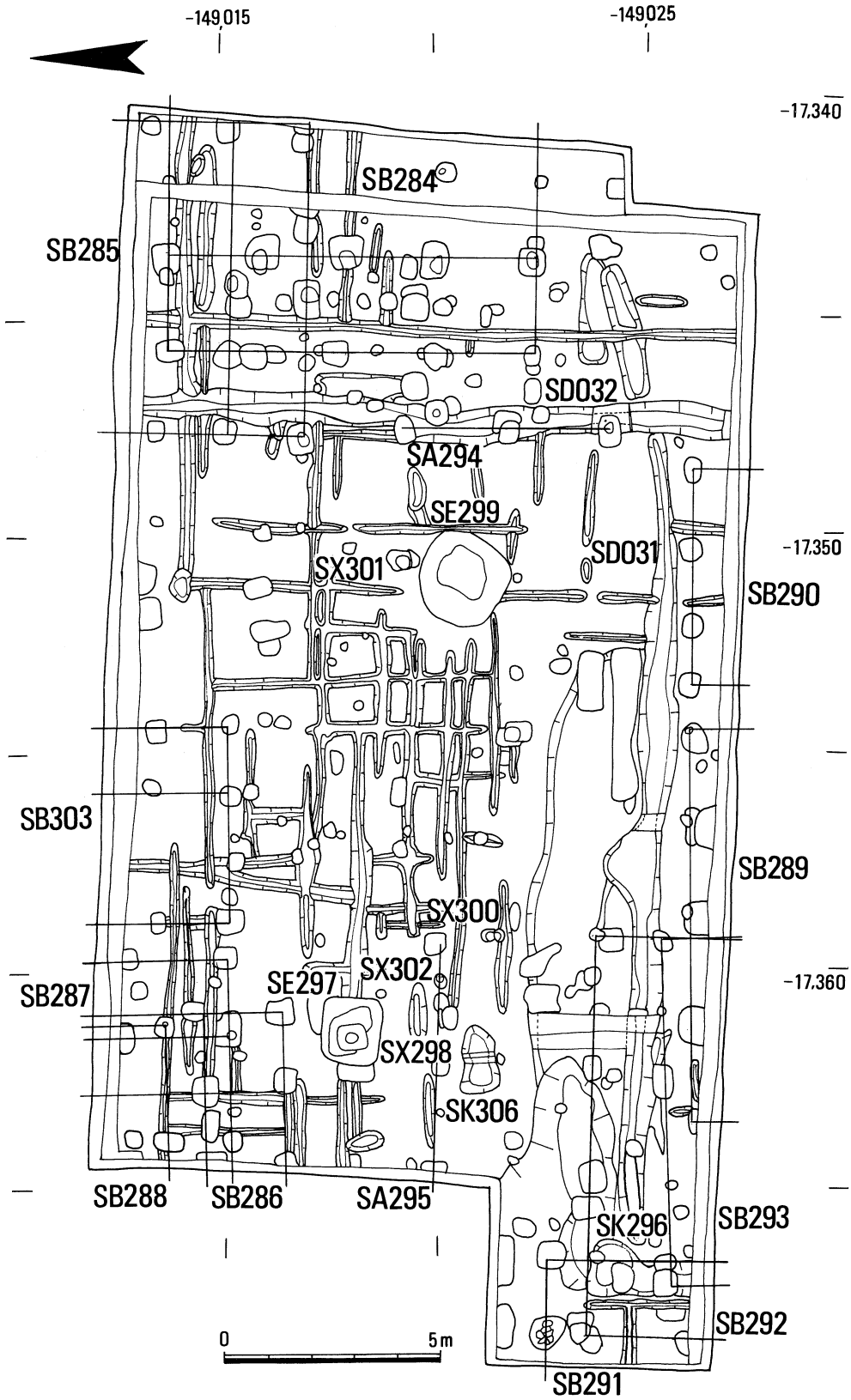


fig. 5　遺構平面図（1／150）

建物を検出した。柱間寸法は桁行、梁間、廂の出とも1.8mである。

ＳＢ287　発掘区北西隅で桁行２間(4.8m)以上、梁間２間(4.2m)以上の東廂付南北棟建物を検出した。桁行の南から１間目の柱筋に間仕切りの柱がある。柱間寸法は桁行、梁間とも2.4m、廂の出1.8mである。

ＳＢ288 発掘区北西隅で東西２間(5.4m)以上の建物の南側柱列を検出した。北と西側は発掘区外へ続く。柱間寸法は、2.7mである。

ＳＢ289　東西溝ＳＤ031の南側で東西４間(9.0m)の建物の北側柱列を検出した。南側は発掘区外へ延びる。柱間寸法は東から2.1－2.1－2.7－2.1mである。

ＳＢ290　東西溝ＳＤ031の南側で東西３間(4.95m)の建物の北側柱列を検出した。南側は発掘区外へ続く。柱間寸法は東から1.8－1.8－1.35mである。

ＳＢ291　発掘区南西隅で南北２間(5.4m)以上、東西２間(3.6m)以上の南北棟建物を検出した。柱間寸法は桁行2.7m、梁間1.8mである。北側柱列の東から２番目の柱掘形に、20～30cmの河原石が7個根石として据えてある。検出した位置が、第１次調査における西面築地想定線上に位置することから門の可能性がある。

ＳＢ292　発掘区南西で桁行３間 (9.3m)、梁間２間(4.8m)以上の東西棟建物を検出した。柱間寸法は桁行が東から3.0－3.3－3.0m、梁間2.4mである。柱穴から８世紀末の土師器・須恵器が出土した。

ＳＢ293　発掘区南西で東西４間(8.1m)の北側柱列を検出した。南側は発掘区外へ続く。 柱間寸法は東から1.65－1.65－2.4－2.4mである。

ＳＡ294　発掘区東で南北２間(4.8m)の掘立柱塀を検出した。柱間寸法は2.4mである。重複関係から溝ＳＤ032より新しいことがわかる。

ＳＡ295　建物ＳＢ292の北側で東西２間(5.4m)以上の塀を検出した。柱間寸法は2.7mである。

ＳＫ296　発掘区南西隅で南北0.85m、東西1.5m、深さ0.21mの平面不整形掘形の土坑を検出した。埋土は暗褐色土で、遺

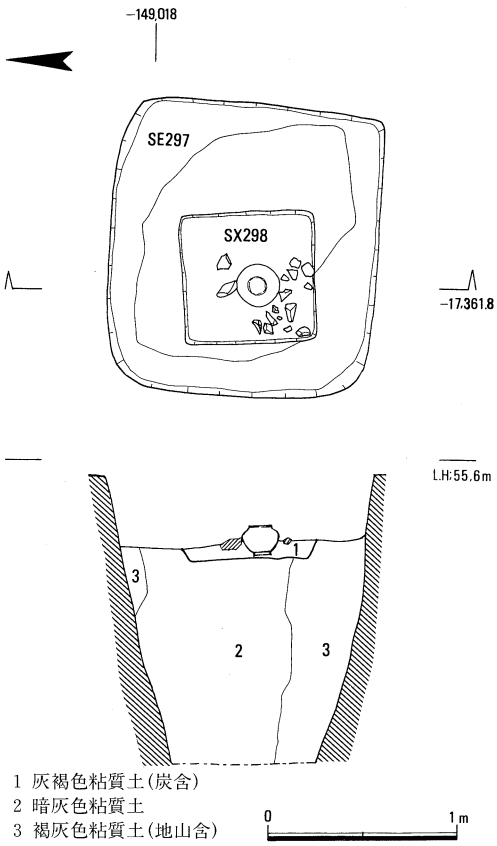


fig. 6　土器埋納土坑ＳＸ298平断面図（1／40）

物は８世紀末の土師器・須恵器・軒平瓦・土馬が出土した。

ＳＥ297　発掘区西で東西1.5ｍ、南北1.4ｍ、深さ1.94ｍの平面隅丸方形掘形の井戸を検出した。井戸枠は抜取られていた。掘形の底には須恵器の破片と２～４㎝大の小石が敷き詰められていた。遺物は井戸枠抜取り痕跡から奈良時代の土師器・須恵器・枠材の一部が出土した。重複関係から土坑ＳＸ298より古いことがわかる。

ＳＸ298　井戸ＳＥ297と重複して土器埋納遺構を検出した。一辺0.7ｍ、深さ0.5ｍの平面隅丸方形掘形の中央に須恵器壷Ａが納められていた。掘形内には５～10㎝の河原石が16個埋められていた。土坑埋土は炭を含む灰褐色粘質土である。壷のＸ線撮影を行なったが、内部は土のみで、遺物は認められなかった。この遺構は井戸ＳＥ297の井戸枠を抜取った後、井戸を鎮める祭祀に関わるものと考えられる。

ＳＥ299　発掘区のほぼ中央で一辺2.1ｍ、深さ２ｍの平面隅丸方形掘形の井戸を検出した。井戸枠は抜き取られていた。遺物は奈良時代の土師器・曲物側板の小片が出土した。

ＳＸ300　発掘区西で東西 0.23ｍ、南北0.44ｍ、深さ0.25ｍの平面楕円形掘形の土器埋納遺構を検出した。土坑内には２個の土師器甕Ａが、南北に接して納められていた。掘形埋土は黄灰色粘質土である。土器の内部は土のみで、土器のＸ線撮影を行なったが、他の遺物は認められなかった。これまで、土坑内に２個の甕を並べ埋納した例

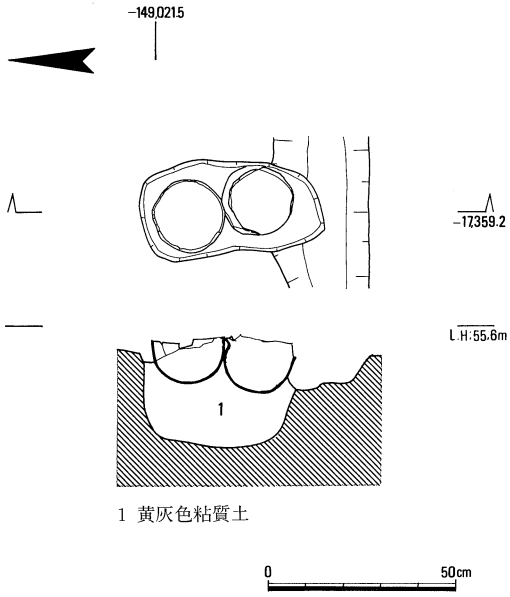


fig. 7　土器埋納遺構ＳＸ300平断面図（１／20）

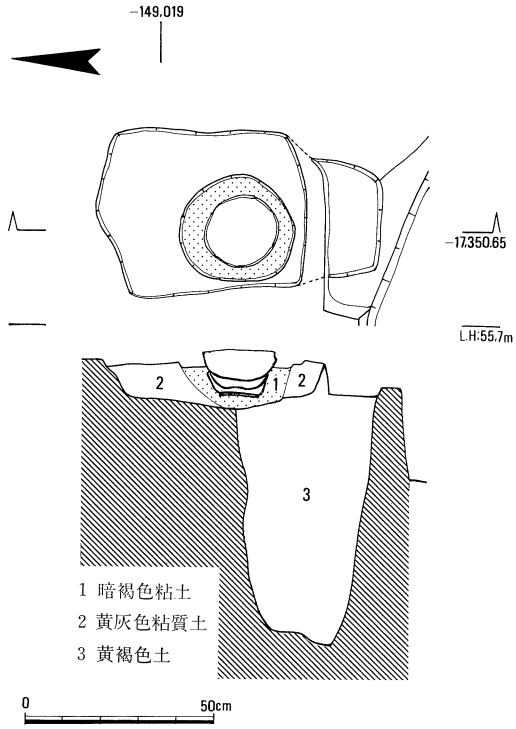


fig. 8　土器埋納遺構ＳＸ301平断面図（１／20）

はなくこれを胞衣壷と考えるなら、同時に２人の胞衣をそれぞれの甕に納めた可能性が考えられる。

ＳＸ301　井戸ＳＥ299北側で東西0.45ｍ、南北0.56ｍ、深さ0.13ｍの平面隅丸方形掘形の土器埋納遺構を検出した。内部に奈良時代の須恵器杯の上に土師器椀を重ねた状態で納められていた。掘形埋土は黄灰色粘質土で、土器の周囲は暗褐色粘土を敷つめ、土器を据えていた。土器を出土状態のままＸ線で撮影を行なうと、土師器椀Ａが２個重なっており、上から二つ目の土師器椀Ａ内に銭貨２枚が認められた。

ＳＸ302　土器埋納遺構ＳＸ300の北側で東西0.25ｍ、南北0.24ｍ、深さ0.07ｍの平面隅丸方形掘形の土器埋納遺構を検出した。内部に、須恵器杯Ａと、その上に土師器杯Ａが重なった状態で出土した。掘形埋土は暗黄褐色土である。

なお、土器埋納遺構出土土器内容物については、科学分析を行い、後日報告する予定である。

平安時代の遺構　平安時代のものには掘立柱建物１棟がある。

ＳＢ303　発掘区北辺で桁行３間(4.5ｍ)以上、梁間３間(4.5ｍ)の東廂付南北棟建物を検出した。柱間寸法は1.5ｍ等間である。柱穴掘形の大きさは不揃いで、埋土から９世紀の土器が出土した。

その他の遺構　時期不明のものとして土坑１基がある。

ＳＫ306　発掘区西辺で東西1.5ｍ、南北0.85ｍ、深さ0.12ｍの平面不整形掘形の土坑を検出した。埋土は黒褐色土である。遺物は出土しなかった。掘形の形態及び埋土から、第14次調査のＳＫ229～236に酷似する。

３　**出土遺物**　遺物整理箱で、21箱分の土器類・瓦類・木製品が出土した。大半が土器類で、瓦は１箱、木製品は１箱分である。土器類には、土師器、須恵器の他、奈良三彩の陶枕が出土した。瓦には、奈良時代の型式不明軒平瓦１点、丸瓦、平瓦がある。木製品には井戸出土の曲物側板の小片、枠材の一部がある。このうち土器埋納遺構ＳＸ298とＳＸ302に納められた土器と溝ＳＤ032上層出土の陶枕について概述する。

１は土器埋納遺構ＳＸ298に埋納されていた須恵器壷Ａである。壷Ａの肩部に蓋を被せ焼成した痕跡が残る。奈良時代中頃から後半にかけてのものである。２と３は、土器埋納遺構ＳＸ302内に納められていた土師器杯Ａと須恵器杯Ａである。２の土師器杯Ａの内面にはラセン状暗文＋放射状暗文＋連弧状暗文が施されている。３の須恵器杯Ａは、焼成が非常に軟質で、底部内面はヘラによる「×」の線刻が施され、底部外面は粘土紐巻上げ痕跡が認められる。奈良時代前半のものである。４は奈良三彩陶枕で、箱形の上面の一部と思われる。外面に緑色・褐色・白色の釉がかかっている。奈良三彩陶枕は、今回出土の他、大安寺旧境内で出土しており京内において２例目で、非常に貴重な遺物資料である。

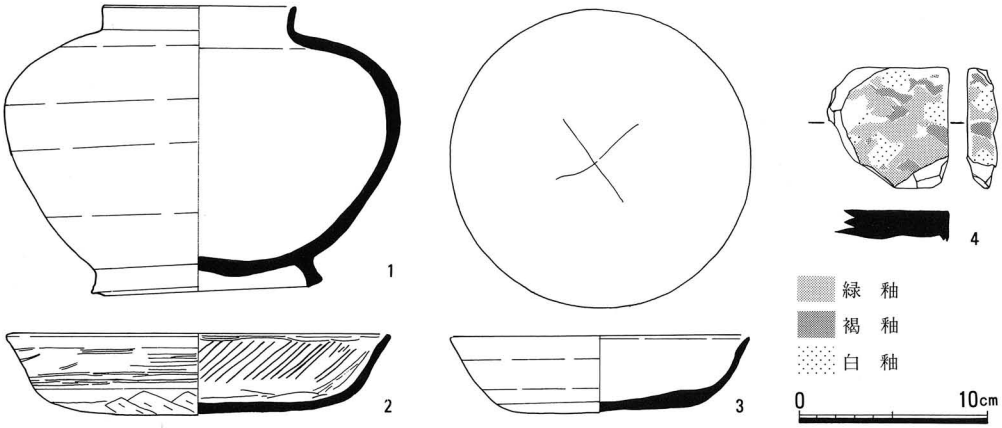


fig. 9　出土遺物実測図（1／4）

III　まとめ

今回の調査において、これまで六坪内で区画溝の検出例が少ないが、溝ＳＤ031・032を検出したことから坪内のこの地域は、区画利用されていたことがわかる。東西溝ＳＤ031が存在していた時期には、溝の南側に建物ＳＢ289・290が建ち、その後ＳＤ031が埋められると南北溝ＳＤ032が掘られる。溝の東側に建物ＳＢ284が建ち、西側には井戸ＳＥ299、土器埋納遺構ＳＸ301が存在する。こうした変遷から、六坪のこの地域はＳＤ031を境に南北に区画された時期とＳＤ032を境に東西に区画された時期がある。

また、東西溝ＳＤ031が埋った後、東西塀ＳＡ295を境に南側に建物ＳＢ291・292・293が建ち、北側に建物ＳＢ286・287・288・303が建ち、溝ＳＤ032が埋められた後、溝を踏襲する塀ＳＡ294と、建物ＳＢ285が建つことから、溝の位置を踏襲する塀で南と北と東に区画された時期がある。

六坪内のこれまでの調査成果では、坪の北東部に総柱建物が並び、比較的規模の大きな建物が建つ一画と、中央付近に建物が存在しない一画があることがわかっている。ところが、今回の調査では、坪の西辺中央において建物が溝や塀で仕切られており、これまでの建物配置と異なる。また、土器埋納遺構のような祭祀に関わる遺構も検出され、京内の通常の小規模な宅地のありかたと酷似している。一方、「平安京東市図」『拾芥抄』（fig.10）をみると、店が建並ぶ屋市、市を管轄する市司、市に携わる人が居住する内町とに市の内部が細かく区分されていることが知られる。平城京の市についてはこうした資料がないことから、市の内部の構造は、必ずしも明確でないが、今回の調査成果より、同じ六坪内でも地域によって差があることがわかる。今後、東市の構造を考える上でこのような事柄も考慮に入れ、東市推定地を綿密に調査する必要があるであろう。

参考史料

浄土宗総本山知恩院所蔵

「平城京市指図」『写経所紙筆授受日記』紙背

東大寺所蔵

「相模国司牒・東西市庄解・相模国朝集使解」『薬師院文書』

東大史料編纂所他　所蔵

「平城京東市図」『拾芥抄』

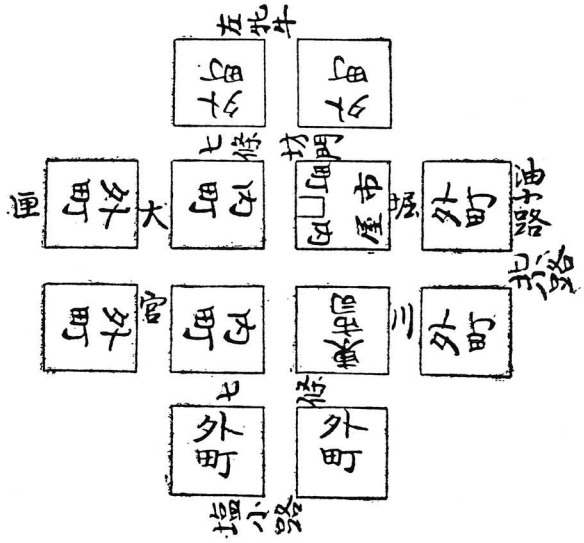


fig. 10　「平安京東市図」『拾芥抄』

参考文献

奈良国立文化財研究所編　1976　『平城京左京八条三坊発掘調査概報・東市周辺東北地域の調査』

奈良国立文化財研究所編　1982　『平城京西市跡右京八条二坊十二坪の調査』

奈良市教育委員会　1983～1996　『平城京東市跡推定地の調査Ⅰ～XⅣ』

奈良市教育委員会　1994　「平城京東市跡推定地の調査第15次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』

奈良市教育委員会　1996　「平城京東市跡推定地の調査第17次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』

奈良市教育委員会　1996　「平城京二条三坊六坪・菅原東遺跡第310・326次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』

奈良市教育委員会　1996　『第14回平城京展－祈りとまじない－』

今泉隆雄　1976　「所謂平城京市指図について 」『史林』59-2

岸　俊男　1976　「日本の都宮と中国の都城」『日本古代文化の探究・都城』

篠原豊一　1997　「平城京の東市」『考古学による日本の歴史』

関野　貞　1907　「平城京乃大内裏考」『東京帝国大学工科大学紀要３』

西村真次　1933　『日本古代経済・交換編第二冊』

福山敏男　1943　「平城京東西市の位置について」『日本建築史の研究』

町田　章　1986　「東西市とその周辺」『考古学ライブラリー44平城京』

pl. 1　発掘区全景 （西から）

pl. 2　発掘区全景 （東から）

pl. 3　発掘区全景　（北から）

pl. 4　発掘区全景　（南から）

pl. 5　土器埋納遺構ＳＸ300
（西から）

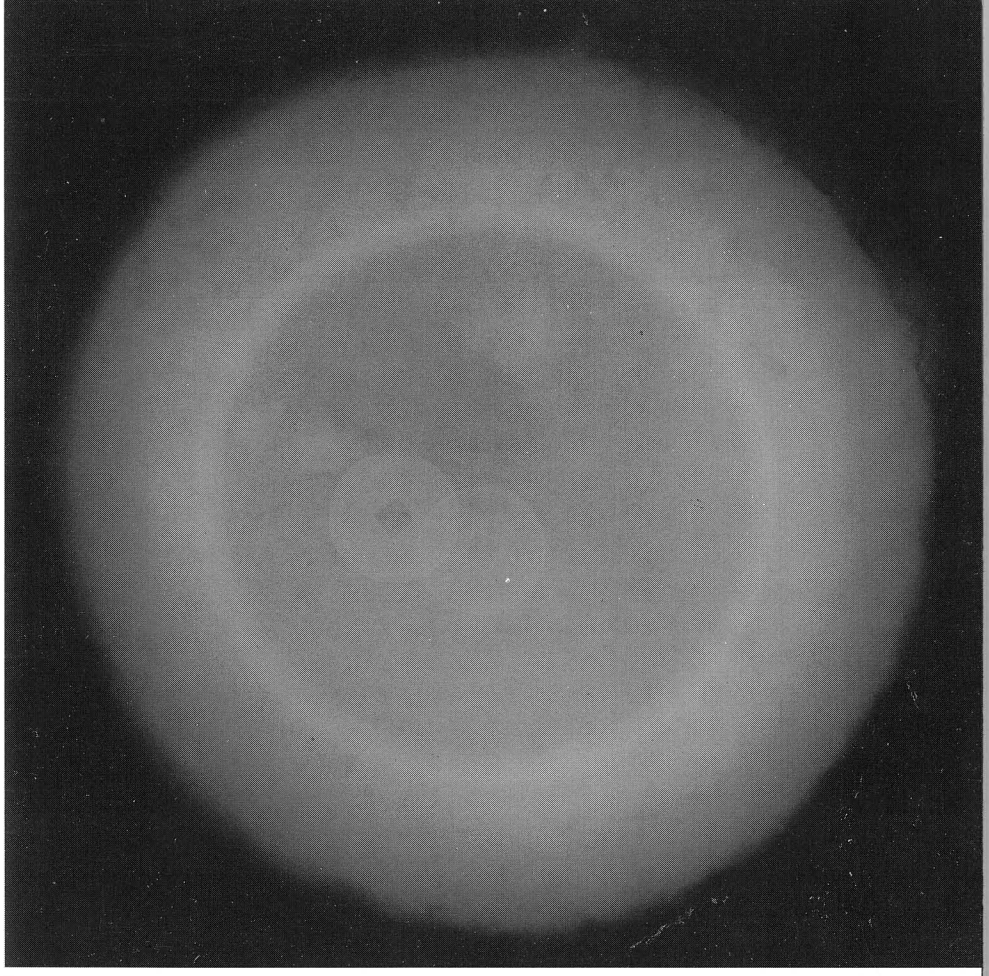
pl. 6　土器埋納遺構ＳＸ300断面
（西から）

pl. 7　土器埋納遺構ＳＸ298
（西から）

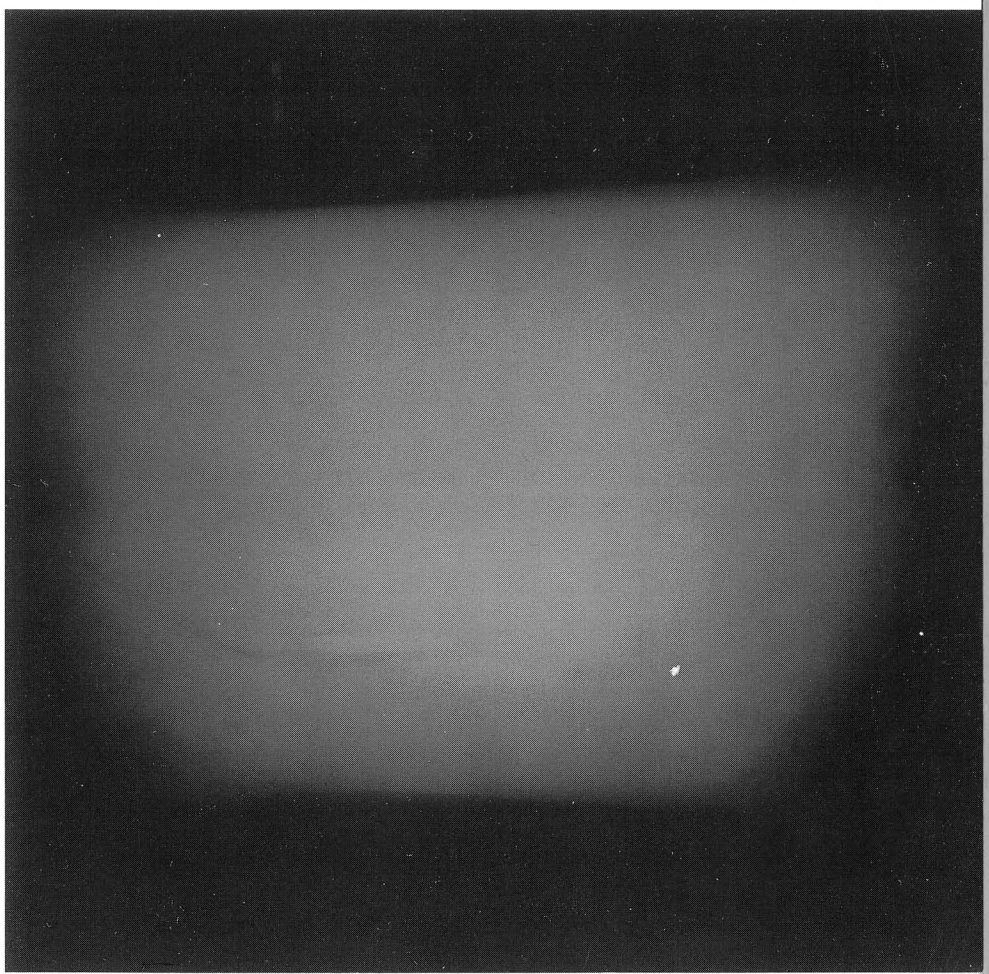
pl. 8　土器埋納遺構ＳＸ301
（西から）

pl. 9　土器埋納遺構ＳＸ301断面
（西から）

pl. 10　土器埋納遺構ＳＸ302
（西から）



pl. 11　土器埋納遺構ＳＸ301
出土土器平面Ｘ線写真



pl. 12　土器埋納遺構ＳＸ301
出土土器立面Ｘ線写真

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいじょうきょうひがしいちあとすいていちのちょうさ　15
書　　名	平城京東市跡推定地の調査　XV
副 書 名	第19次発掘調査概報
シリーズ名	平城京東市跡推定地の調査
シリーズ番号	XV
編著者名	技術吏員　秋山成人
編集機関	奈良市教育委員会
所 在 地	〒630　奈良市二条大路南一丁目１－１　ＴＥＬ 0742－34－1111
発行年月	1997年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査機関	調査面積 ㎡	調査原因
へいじょうきょうひがしいち 平城京東市 あとすいていち 跡推定地	ならしからももちょう 奈良市杏町 584	29201	－	34度 39分 21秒	135度 48分 42秒	1996.11. 18~1996. 12.27	400	重要遺跡 範囲確認 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平城京東市跡 推定地	都城	奈良時代 平安時代	堀立柱建物11棟 堀立柱塀２条 溝２条 土坑２基 井戸２基 土器埋納遺構 ４基	土師器　須恵器 奈良三彩陶枕 土馬 銅銭 曲物側板 井戸枠材	坪内の区画溝と塀を確認 発掘区中央で祭祀に関わる土器埋納遺構を確認

奈良女子大学蔵書
981006701003

平城京東市跡推定地の調査 XV
第19次発掘調査概要

平成９年３月25日　印刷
平成９年３月31日　発行
編集・発行　奈良市教育委員会
（奈良市二条大路南一丁目１－１）
０７４２－３４－１１１１（大代）
印　　刷　共同精版印刷株式会社
（奈良市三条大路二丁目２－６）
０７４２－３３－１２２１
０７４２－３３－７０３５（FAX）

奈良女子大学附属図書館

表　紙　浄土宗総本山知恩院所蔵「平城京市指図」『写経所紙筆授受日記』紙背